



全国私立大学 FD連携フォーラム

News Letter No.10

CONTENTS

-
- P. 2-4 2015年度取組概要
2015年度後半期活動報告
-
- P. 5-6 大学インタビュー
早稲田大学／九州産業大学
-
- P. 7 FD徒然草 Part 9 『大学教師とFD』
中央大学 文学部長 都筑 学
-
- P. 8 入会のご案内／実線的FDプログラムのご案内
-

2015年度 取組概要

2015年度 幹事会

日 時: 2015年6月13日(土) 12:00～13:00

会 場: 法政大学 市ヶ谷キャンパス

2015年度 総会・パネルディスカッション

日 時: 2015年6月13日(土) 13:00～17:00

会 場: 法政大学 市ヶ谷キャンパス

◆パネルディスカッションテーマ

私立大学における今後のFDの展開
一学内外連携と教育情報の公開を軸に一

◆基調講演

法政大学 教育支援本部担当常務理事 佐藤 良一 氏

◆パネリスト

同志社大学 商学部 教授 百合野 正博 氏
龍谷大学 学修支援・教育開発センター長 長谷川 岳史 氏
東洋大学 IR室 准教授 劉 文君 氏

◆コーディネーター

法政大学 理工学部 教授 教育開発支援機構 FD推進センター 推進プロジェクトリーダー 川上 忠重 氏

2015年度 代表幹事校ミーティング

日 時: 2015年10月7日(水) 12:30～13:00

会 場: 立命館大学 東京キャンパス・衣笠キャンパス

2015年度 幹事校・会員校ミーティング

日 時: 2015年12月21日(月) 13:00～14:00

会 場: 立命館大学 東京キャンパス・衣笠キャンパス

2015年度 懇談会企画

日 時: 2015年12月21日(月) 14:00～16:30

会 場: 立命館大学 東京キャンパス・衣笠キャンパス

テーマ: 学習支援・学生支援

2015年度 後半期活動報告

2015年度懇談会企画 開催

JPF 幹事校（中央大学・立命館大学）

2015年12月21日（月）、JPF加盟校による第5回懇談会が開催されました。この懇談会は、各大学におけるFD活動の取り組みの改善・発展の一助とすることを目的とし実施しています。

今回は、大学教育における最もホットな話題である「学習支援・学生支援」をテーマとして、事前に参加各大学からキーワード、各大学での取り組みをレポートにまとめていただき、関東・関西各会場で教員・職員に分かれて議論のうえ、全体で議論の内容を共有しました。

「学習支援・学生支援」は、教職協働、大学内の部門間連携によって取り組まれており、各大学の特色を活かした実践例が報告されて、相互に学びあうことができました。また、今日の大学教育に共通する課題も多く出され、JPFの存在意義も確認できる有意義な懇談会となりました。

【実施概要】

日時：2015年12月21日（月）14:00～16:30
（会員校ミーティング終了後）

場所：関東会場 立命館大学 東京キャンパス
関西会場 立命館大学 衣笠キャンパス
（※テレビ接続）

【テーマ】

学習支援・学生支援

【懇談会参加大学】（50音順）

神奈川大学、関西大学、関西学院大学、関東学院大学、北里大学、甲南大学、神戸学院大学、國學院大学、芝浦工業大学、中央大学、中京大学、中部大学、東京農業大学、東洋大学、日本大学、法政大学、名城大学、龍谷大学、早稲田大学、立命館大学

【参加各校から出された主なキーワード】

- ・障害者差別解消法に基づく大学における合理的配慮のあり方
- ・全学共通教育（教養教育改革、初年次教育）
- ・教育の質保証と学習成果の可視化・測定
- ・授業アンケートの効果的導入（Web実施）
- ・グローバル化、アクティブ・ラーニングに対応した学年暦のあり方について
- ・キャンパスにおけるグローバル化対応
- ・キャリア教育・グローバル教育等に関わる部門間連携
- ・ピアサポート・マネジメント
- ・高大接続のあり方
- ・学習支援の観点からのFD概念の捉えなおし
- ・大学職員のFDへの関与
- ・University Developmentを切り口とした教職協働
- ・ラーニング・コモンズの活用、活性化方策

【各グループでの討議のまとめ】

- 障害者差別解消法に基づく大学における合理的配慮のあり方については、今後、支援要請が増えてくると予想される。各大学においてすでに取り組まれている事例（キャンパスソーシャルワーカーの配置、健康管理センター等での自助グループの取り組み）が報告された。一方で、複数組織が学生支援にあたっており、縦割りの弊害なども指摘された。引き続き、各大学での取り組み状況を共有するとともに、合理的配慮の基準や運用について情報交換していくこととした。
- 正課外での学習支援は、授業と密接に関連性を持たせて取り組むことによってより有効になるとの事例が紹介された。学習・学生生活に困難を抱える学生は、支援のしくみを活用できない、モチベーションの維持・向上が難しいなど共通の課題を持っていることも明らかになり、引き続き各大学での取り組み

を共有していくこととした。

- ピア・サポート活動については、各大学で様々な目的で導入されている。ピア・サポート活動を行う学生たちがどのように成長しているかについて、身につく力を可視化させるブリック形式で評価する取り組み、学生自身がワークショップを通してそれを振り返り、ピア・サポート活動のあり方について部門や学部を超えて教職員とともに検討する取り組みを行っている事例が紹介された。ピア・サポーターは、その成り立ちから有償・無償などあり方も異なるが、ピア・サポート活動自体は、学生自身の成長感を大切にする必要があり、教育的取り組みとして位置づけることができることなどが共有された。
- 近年、ラーニング・コモンズの整備が進み、各大学において様々な理念・目的をもって取り組みが開始されている。学生の居場所、学生が使う場所ということにとどまらず、アクティブ・ラーニングやピア・サポート活動等教育において有効に活用していくためには、全学で理念・目的を共有していくことが求められる。また、利用促進をはかるための取り組みやスタッフの配置、スタッフ研修などコモンズで学生が主体的に学ぶために整理すべき課題も多い。大学によっては任期付教員等を雇用しているが、職員の果たす役割も大きくなっていることから、職員の能力開発等も課題として共有された。
- 教育の質保証と関わり、学習成果・効果の測定が課

題となっている。外部に指標を求めがちであるが、目的・コンセプトを明確にして全学で共通認識をもって指標・基準を検討していくことが重要であること、次期認証評価で求められることが想定されている教育課程全体を通じたトータルな学習成果について今後、各大学での検討状況について共有していくこととした。

- 学習支援の枠組みが広がっており、センターを置くことで全学の蓄積は可能となった。一方で、学部等に対応する教職員の力量形成、集団化は課題を持っており、全体と個々の組織での取り組みのバランスが難しい。教員と職員、部門を超えた連携は場所の問題も大きく、学習支援の課題が広がっている現在だからこそ、相互連携が重要であることが共有された。

【懇談会のまとめ】

私立大学は、人材育成目的、教育目標が建学の精神に基づいて特色を持って設定されており、それにそった学習支援が行える強みを持っています。各大学が、各方針（実践）と理念・目的（理論）を往還するなかで効果検証・測定を進めていくことが重要であり、FDは、そのための共通認識を作る場であるといえます。懇談会では、大学間で共通する課題も多く出され、どのように解決策を導きだしていくかを共有し、学びあう場としてJPFFを位置づけていくことしたいと考えています。

会員校ミーティング報告

1. 役職校への旅費支給についての変更

「全国私立大学FD連携フォーラム 申し合わせ事項」において役職校への旅費の支給について、総会、ミーティング、地域別企画の参加および監査に関わるものについて定めています。

今後の活動をより活性化することを目的に、全国私立大学FD連携フォーラム（JPFF）での企画充実、JPFFに対してFD企画等の参加要請があったものに対して、JPFFとして協力をしてくため、旅費の支給を行うことにしました。

また、厳正な予算管理の観点から、申し合わせ事項の一部変更、旅費支給の所定書式を整えました。

2. 東北大学主催「大学教職員の能力開発に関する懇談会」への参加

東北大学 高度教養教育・学生支援機構より「大学教職員の能力開発に関する懇談会」参加要請がありました。2015年10月19日、2016年2月16日の2回にわたって他大学および複数の大学が加盟するネットワークとの情報交換を目的として、役職校より懇談会に参加しました。中央教育審議会、次期認証評価においても大学教職員の能力開発は重視されています。引き続き、全国の大学との情報交換をすすめます。

▶ 早稲田大学

早稲田大学のFD普及の取り組み



早稲田大学 大学総合研究センター副所長
人間科学学術院 准教授
森田 裕介

早稲田大学では、2013年度に大学総合研究センターを設立し、そのCTLT (Center for Teaching, Learning and Technology) 部門において、効果的な教育方法の開発・普及に取り組んでいます。FDの推進はCTLT部門の業務として位置付けられており、全学へのFDプログラムの提供やアクティブな教育手法の整理、紹介を行っております。

具体的な事例としては、学習者中心の考え方をベースとした教授法を学内に導入していくために、海外大学と連携した取り組みを進めています。学生の学修効果を高め、国際的に通用する授業運営方法を教員が習得することを目的に、2014年4月に協定を結んだ米国ワシントン大学（シアトル）や、五大湖・中西部私立大学連盟加盟校（GLCA/ACM）のリベラルアーツカレッジへ、選抜した教員を約3週間派遣する、実践的なFDプログラムを継続的に実施しています。

ワシントン大学のFDプログラムには毎年15名程度の本学教員を派遣しており、これまでに100名以上が受講した実績があります。FD参加者らは、ワシントン大学の様々な授業を参観して日本との共通点や相違点を議論したり、学習科学を基盤とした教育理論のセミナーを受講しつつワークショップを通じて自身の授業を再設計したりしています。

特筆すべきは、本学とワシントン大学の教員が、学生の特性や文化的な違いを相互に理解しつつ、効果的なFDプログラムを協働的に開発しようとしている点です。2015年度には、希望はあってもなかなか時間が作れない教員のために、2週間に圧縮したプログラムを実施しました。参加教員の意見をもとに、本学の実情に合わせて、より効果的かつ実践的な内容へと継続的に改善を進めております。また、FDに参加して

いる教員の専門領域と合致したワシントン大学の教員をホスト教員として割り当ていただき、教員間の交流や共同研究の促進を促しております。

ワシントン大学との連携は米国内の取り組みだけではありません。ワシントン大学の教員が来日し、日本側でも連携活動を進めています。2015年度にはUW-Waseda Joint Projectを本格始動し、Summer FDプログラムとして、新任教員を対象とした1 DayのFDセミナーを早稲田大学で開催しました。今後は、ワシントン大学と本学がそれぞれ保有する教育・研究リソースを融合し、ICTを活用したブレンド型授業や新たなアクティブラーニングの手法の研究・開発を共同で取り組んでいきます。Teaching, Learning, Assessmentを柱とした新しい教育メソッドの確立を目指しており、開発したプログラムは、国内外に幅広く展開していく計画です。

一方で、啓発・普及のための活動として、授業運営について教員が意見を交換するイベント、「Faculty Café」を開催しています。文字通りコーヒーを飲みながら、海外FDプログラムで授業運営方法を学んだ教員をはじめとして、意欲ある教員が自由に参加し、自由な意見交換をしています。たとえば学生300人の大規模教室での講義に導入できるアクティブラーニング手法について、実際に取り組んでいる事例を参加者が紹介したり、授業運営における悩みやアイデアを話し合ったりしています。授業方法から発展して、アクティブラーニングに適した教室のデザインについて意見を交わし、教室設計の部門に提案したりもしました。この活動を定期的の実施し、活動の輪を広げていきたいと考えています。

▶九州産業大学

九産大型FD活動

～教員・職員・学生の三者協働によるFD～



九州産業大学
教務部長
秋山 優



九州産業大学
教務係長
一ノ瀬 大一

本学は、1960年に創設者中村治四郎先生が「産学一如（産業と大学は車の両輪のように一体となって時々の社会のニーズを満たすべきである）」を建学の理想として開学し、現在では、社会科学系、理工系及び芸術系の8学部20学科、大学院5研究科を擁し、1万人を超える学生が学ぶ総合大学となり、これまでに11万人を超える卒業生を社会に送り出してきました。

さて、本学のFD活動は、全学的なFD委員会を基軸として、FD研修会、授業アンケート、1年次生アンケート、公開授業や授業情報研究会など、さまざまな取り組みを行っています。

また、授業アンケートの実施後には、授業改善報告書の提出が義務づけられ、それをもとに、各学部長等により授業改善に有益と考えられる項目を抽出した上で、共通理解を図るために公開するなど、教育改善に関する教員個人の創意工夫に役立つようフィードバックする取り組みも展開しております。

しかしながら、2008年のFD義務化後、「組織的」というキーワードに対応した取り組みとしては、教員個人の教育改善には一定の成果を感じているものの、それぞれの取り組みの成果が学内全体に定着しているわけではないとも感じております。

したがって、近年では、「組織的な取り組み」をキーワードに、(1) 教職協働に加えて学生が関わるような、(2) 具体的な目標を設定し、行事もしくはワークショップ型の研修を中心としたFD活動を推進しています。

一つは、年2回開催する「大学教育フォーラムin九州産業大学」です。本フォーラムでは、毎回、アクティブ・ラーニングや高大接続をテーマに掲げ、教員、職員および学生がテーマに基づいたワークショップを行っています。時には、高校教員や高校生にも参加していただき、活発なディスカッションを展開しております。高等教育に関係する当事者が一堂に会し、異なる視点から意見交換をおこなうことにより、授業改善はもとより、ポジティブな気づきにつながっています。

二つ目は、2015年度から全学的に導入したLA（ラーニング・アシスタント）制度です。これは、初年次ゼミナールの1クラスに、先輩学生1名を配置する制度ですが、LAは、授業前と授業後に担当教員との打合せや準備を含めて、毎回勤務し、時には、モデルプレゼンテーションを行うこともあります。この制度を導入することで、担当教員の授業改善はもちろんのこと、LA自身の成長や1年次生の学修意欲の向上など、副次的な効果も得られました。

LAを希望する学生には、事前・事後研修が義務づけられており、事前研修では勤務条件や業務内容の確認だけでなく、LAとしての目標を立てるワーク型研修を取り入れ、事後研修では次年度のLA活動に向けた課題を抽出した上で、解決案の提案までを行っています。この課題と解決策は、当該学部にてフィードバックされ、次年度の初年次クラスの授業内容やLA業務の改善に役立てられています。

本学においては、これらの取り組みの中心となって企画・立案・実践しているのは、職員です。複数部所の職員が協働して、大学教育フォーラムやLA研修の内容を検討し、各学部や学生と調整した上で実践しています。FD活動を教員による授業改善として一面的に解釈するのではなく、大学構成員が三位一体となった協働関係の中で様々な取り組みを実践しながら、考え、意見交換することこそが何より重要であると考えているからです。

最後に、教育重視の大学を目指す本学としては、組織としての教育力向上を念頭において、引き続き全国私立大学FD連携フォーラムに参加させていただき、多くのことを学びたいと存じますので、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。



大学教師とFD



中央大学文学部長
都筑 学

FDと言えば、Floppy Diskのことを指していた頃の話である。私が初めて教壇に立ったのは、女子短期大学だった。就職前には、大学で教えた経験が全くなかった。最初の授業では、用意してあった内容を話し終えたら、30分も授業時間がまだ残っていた。そんな具合で、毎週かなり苦戦しながら授業していたのだった。半期の講義が終わったときに書いてもらった感想文の中に、今でも忘れられないものがある。「都筑先生は、なぜいつも教室の右側の窓の外を見て話すのですか」。ガーンと頭を叩かれたような感じだった。自分では、そんな風に授業していることに全く気づいていなかったからである。

このようにして、大学教師としての生活が始まった。自分の技量がないものだから、大学における教育活動について模索する日々が続いた。そんなときに、原正敏・浅野誠編『大学における教育実践（全3巻）』（水曜社、1983年）が出版された。早速読んで、大学教師の役割について考えてみた。自分の授業（教育心理学の4年分）を自分なりに検討して、論文にまとめた。『短期大学における心理学教育実践の検討』大垣女子短期大学研究紀要 1985年 22号 65～77頁。心理科学研究会の担当運営委員として、『大学教育実践ニュース』の発行にも携わった。心科研会員に執筆依頼して、「大学教育と教師の仕事」（創刊号）、「講義における授業改善の工夫」（2号）、「学生の立場から見た大学教育」（3号）などの特集を組んでいった。1986年から2年間に、8号のニュースを発行し、1988年4月に中央大学に異動した。このように振り返ってみると、前任校での7年間は、大学教師としての基礎形成の段階だったのだと思う。

そして現在。FDと言えば、もちろんFaculty Developmentのことである。大学における教育活動を考え、展開していくのは、ごく当たり前のことになった。中央大学でも、FD推進委員会がその中心的な役

割を果たしている。私自身、FD担当学部長として、中央大学におけるFD活動を推進していく立場にある。一人の大学教師としては、それなりに経験を積んできたと思う。「亀の甲より年の功」で、授業の内容の引き出しも増え、心の余裕も持てるようになった。最初の頃は、黒板とチョーク、プリントの配布という授業だった。それがいつしか、OHP（Over Head Projector）での教材の提示になった。その次は、Power Pointで資料を示しながらの授業に変わった。授業の感想も、紙に手書きの形式からケータイ（スマホ）でのメール送信になった。中央大学では、この4月から、授業の出席、資料の配付、レポートの提出、アンケート、小テストなどをmanaba上で実施する体制が整った。手作り感満載の授業から、ICTを活用した授業へ。教師から学生への一方向的な授業から、アクティブ・ラーニングを取り入れた双方向的な授業へ。道具立ての変化とともに、大学の授業の概念自体が根本的に変革されていく時代になったのだ。こうした動きに、どれぐらい追いついていけるのか。新しいツールをどれぐらい取り入れていけるのか。学生のニーズに、どれぐらい応えていけるのか。大学教師としての積極性や意欲の発揮のしどころである。

大学における授業は、コンサートのようなものだ。客席には、学生たちが座っている。教壇が舞台である。その上で、何をするか、どのように授業を組み立てていくか、それが問題だ。学生たちをどれぐらい惹きつけられるか。教師としての力量が大きく問われるのである。魅力のないコンサートには、観客は集まらない。世間の目は厳しいのだ。大学教師は、自分の授業を自己点検しなければならない。まずは、そこから始める必要があるだろう。自己点検・自己評価の本来の意味は、自分の教育実践を客観視するところにあるのだから。私自身、そのことを肝に銘じて、明日からもまた教壇に立とうと思う。

入会のご案内



全国私立大学FD連携フォーラムは、全国の中規模以上(学生数8,000名以上)の私立大学が連携し、全国の高等教育の質の向上を目指し、活動しています。本フォーラムでは、高等教育の質の向上に資するため、加盟校間での情報共有や意見交換を促進しています。

ウェブサイトでは取り組みの概要や、加盟校のFD活動についてご紹介しております。詳しくは下記ページをご覧ください。

URL: <http://www.fd-forum.org/fd-forum/>

入会を希望される場合には、ウェブサイト「入会のご案内」から「入会届」をダウンロードの上、事務局まで郵送でお送り下さい。

※フォーラム運営に係る費用は、会員校の年会費で賄っております。

(年会費:5万円(2016年3月現在))

※入会に関するご質問がございましたら、事務局までお問い合わせください。

実践的FDプログラムのご案内

実践的FDプログラムとは、教員が自らの授業を専門分野と教育学の観点から省察することができる知識、技能、態度、特にアクティブラーニングを実践する能力を修得する研修プログラムです。

本プログラムは、教員の4つのアカデミック・プラクティス(教育、研究、社会貢献、管理運営)に対して、

- ① 教育学をはじめとした系統的な理論のオンデマンド講義
- ② 授業技術やコミュニケーションスキルを育成するワークショップ
- ③ 個々の教員ニーズに応える日常的な教育コンサルテーション

から構成されています。

私立大学には、クラス規模の大きさ、教員の持ちコマ数の多さ、学生の学力と学習意欲の多様性など、多くの困難な教育条件が存在します。たとえば、各大学では、新任教員研修において本プログラムを利用することを通して、大学教員に求められる教育力量と職能を育成し、大学教育の質を保証することが可能となります。

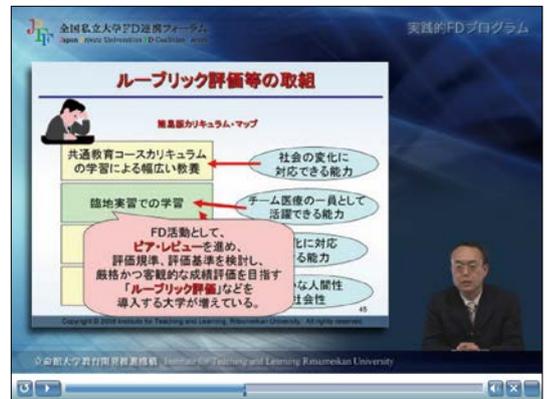
各大学の対象者や実施目的の違いによって、講義(オンデマンド)や講座(ワークショップ)等を選択し、様々なプログラムを作ることが出来ます。詳しくは、ウェブサイトをご覧ください。

JPF会員校

http://www.fd-forum.org/fd-forum/html/fd_application.html

JPF非会員校

http://www.ritsumei.ac.jp/acd/ac/itl/fd_p/fd_program.html



利用申込について

利用期間は1年間となります。(5月利用開始、翌年3月末終了)

上記のウェブサイトより「利用申込書」をダウンロードし、事務局へお送り下さい。

利用申込は随時受け付けておりますが、手続きのため、利用いただけるまでに約2週間かかります。

事務局校

立命館大学 (事務局:教育・学修支援センター 担当部署:教務課)

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 TEL:075-465-8304 FAX:075-465-8318 e-mail:fd71cer@st.ritsumei.ac.jp